



竹富島における住宅跡地の土地利用の変遷と管理

Land use change and management of residential site in Taketomijima Island, Japan

堀 光順

Kohjun HORI

【要旨】

沖縄県竹富島は1987年に重要伝統的建造物群保存地区に指定され、伝統的な家屋が残る離島である。伝統的な家屋、豊かな自然を観光資源として、石垣島との距離が近いこと、石垣島からの日帰り観光客を対象とした観光業が盛んである。竹富島の人口は、本土への若者の流出が続いた結果、1945年の2,168人をピークに、2012年には323人へと減少した。こうした人口減少により、多くの空き屋敷や空き地が出現した。島民は、観光資源としての伝統的な景観を守るため、1986年に竹富島憲章を制定し、島民が管理人としてそれぞれの空き地を管理し、整備することが定められた。しかし、空き地の管理方法や利用の用途が明記されなかったため、管理人により様々な土地利用が出現する結果となった。本研究では、住宅跡地の土地利用を現地調査し、空き地の新たな土地利用の特徴と、重要伝統的建造物群保存地区に指定された1980年代末以降の土地利用の変化を明らかにした。

キーワード：土地利用、住宅跡地、竹富島、管理、観光資源

1. はじめに

わが国における離島地域では、限られた雇用機会や高等教育機関の有無により、島内の人口流出が急速に進行する地域が多い。離島振興法においても「四方を海等に囲まれ、人口の減少が長期にわたり継続し、かつ、高齢化が急速に進展する等」と明記されている。離島地域に限らず、地方において耕作放棄地や空き家の問題が深刻である。

耕作放棄地は病虫害・鳥獣被害の発生、雑草の繁茂、用排水施設の管理への支障など、周辺地域の営農環境への悪影響が考えられる。また、土砂やゴミの無断投棄や火災発生など地域住民の生活環境への悪影響の原因となることが考えられている(農林水産省 2009)。空き家に関しては、災害時における倒壊といった防災面や不審者の居住といった防犯面の問

題に起因すると考えられている。これらの問題は、人口減少がすすむことで、管理する人が少なくなり、発生するとされている。人口減少が引き起こす問題に対応することが離島地域をはじめとした地方では急務となっている。

先行研究として、まず伝統的家屋に関する研究が行われている。西山・花岡(2008)は、竹富島における赤瓦の伝統的家屋について、建築構造を明らかにし、保存要件を設定した。また、時間の経過により材料や技術が変容する、もしくは途絶えた時期や過去の使用目的が失われた時期を明確にした。このような竹富島の特性を踏まえたうえで、重要伝統的建造物群保存地区に適合する新たな選定基準を設定した。

農業に関する研究として浮田(1974)は、沖縄県八重山諸島において船や車を利用した遠

距離の近い耕作について研究をした。この近い耕作の発生要因を、島民がマラリアに罹患しない取り組みであることと、琉球王府時代から行われた人頭税によると明らかにした。また、八重山諸島の各島の主要な耕作先と耕作手段、期間や栽培作物を明らかにした。

観光開発に関する研究として谷沢(2010a; 2010b; 2011)は島民への聞き取り資料をもとに、1970年以降から始まった観光開発と保存運動について明らかにしている。本土の観光開発会社による土地の買い占めに対し、島民らが伝統的な独特な景観を守る取り組みを開始し、それが重要伝統的建造物群保存地区に指定されることに進展した。また、重要伝統的建造物群保存地区に指定された後には、種子取祭など竹富島独特な地域文化と景観を合わせた観光化が進められたことを明らかにした。

このように、観光化など事象ごとの変化は明らかにされているが、通史的な変化を明らかにした研究はない。そこで、本研究では離島地域において人口減少が進行したものの、重要伝統的建造物群保存地区に指定され、観光業を島民中心に展開し、島内の人口が回復している竹富島を対象地域として、通史的な

社会的な変化が土地利用にどのような変遷を与え、管理が行われたか明らかにする。

2. 対象地域概要

対象地域は、沖縄県八重山郡竹富町竹富島である(図1)。竹富島の面積は5.4 km²、外周9 kmの平坦な隆起珊瑚礁でできた島である。八重山郡の中心地である石垣島から約6 km西に位置し、高速船により約10分で結ばれている。竹富島には東集落と西集落、仲筋集落の三集落があり、それぞれの集落は島の中央部分に集中している(図2)。島にはむやみな開発を避け、自然や文化を守る「竹富島憲章」がある。独特な景観や文化を保存する意識が多くの島民に共有されているといえる。このような景観や文化観光資源として観光業が営まれている。

集落は1987年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。島の中央部に位置する集落域を中心とした38.3 haが、伝統的建造物群および周辺の環境が地域的特色を顕著に示しているものとして、重要伝統的建造物群保存地区に指定された。竹富島の屋敷は、珊瑚

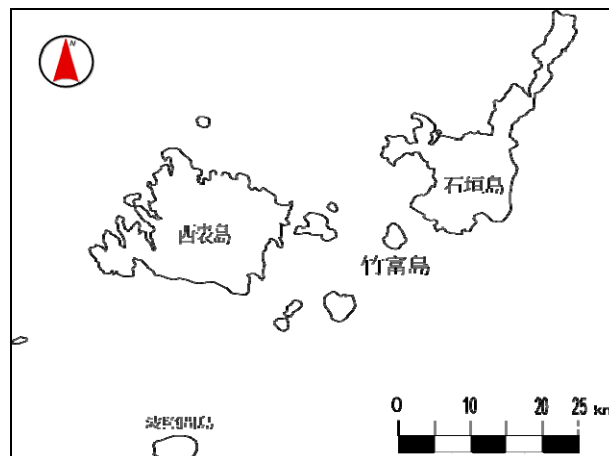


図1 研究対象地域

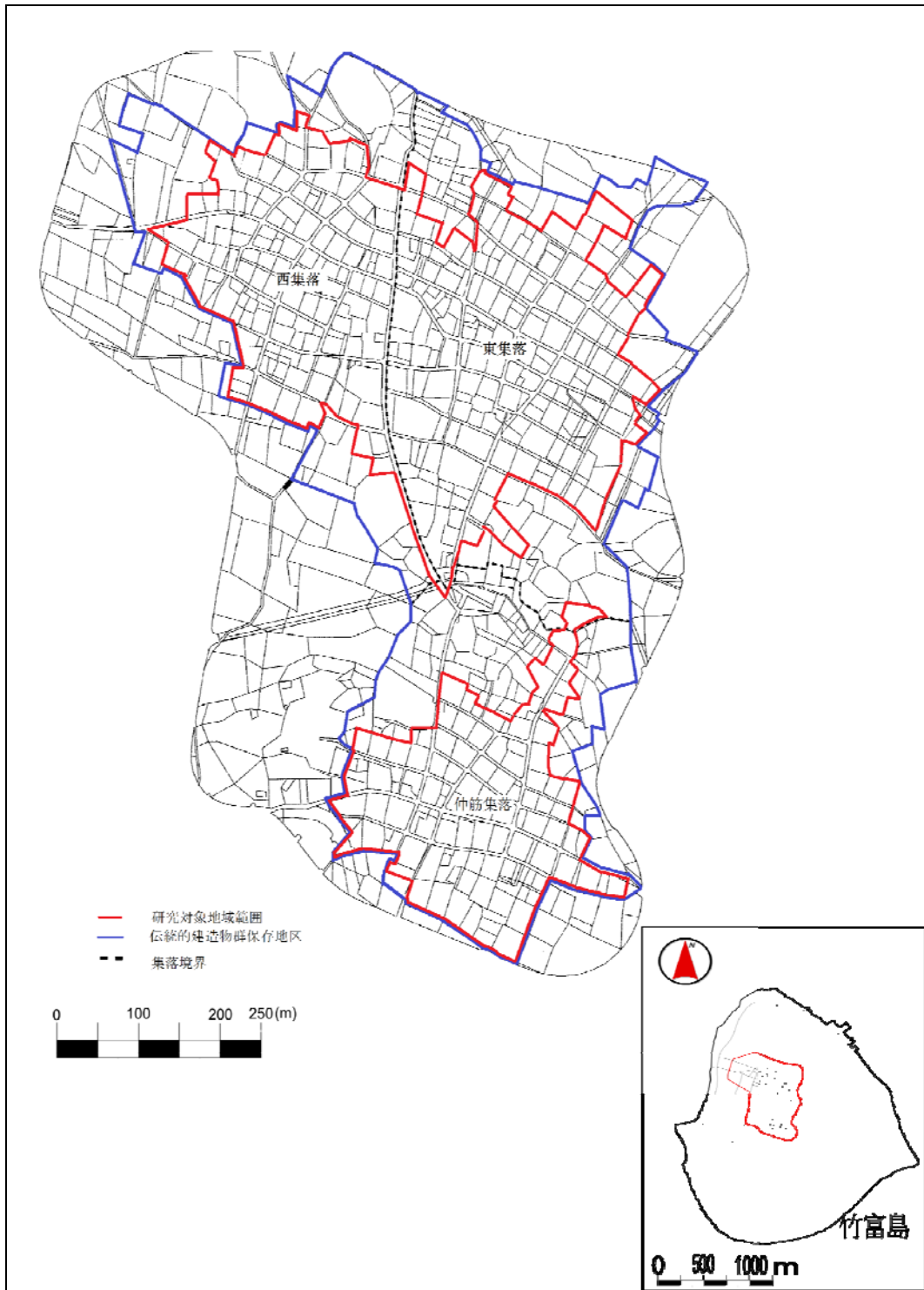


図2 研究对象地域(集落部)
『歴史的景観形成地区保存計画書』より作成

石灰岩の石垣を屋敷地にめぐらせ、中央部に主屋が建ち、西隣に炊事場の家屋が建つ独特な形式を保っている。また、屋根には赤瓦を用い、集落の道には白砂を敷き詰めるなど独特な景観が残されている。竹富町は重要伝統的建造物群保存地区に指定された地域の保存計画を作成し、景観を保つように取り組まれている。

3. 竹富島における社会的な変遷

3-1. 竹富島における集落の変化

木崎(1985)『琉球弧の地質誌』によると、竹富島は島の大部分が琉球石灰岩に覆われており、降水があったとしても、すぐに伏流してしまい、水を得にくく水田を作ることができない。そのため、古くから集落は水を得ることのできる井戸の周辺に形成された。一般的な珊瑚礁の島の井戸は塩分が混入することが多い。しかし竹富町史編集委員会(2011)によると、竹富島では島の北端から南西部にかけて古生層が分布している。そのため、生活水として利用できる水を確保することが可能である。

ではなぜ水の得にくいこの竹富島に集落を形成する必要があったのだろうか。大城(1990)によると、八重山諸島における高い島¹⁾では利水の便がよく、水田を形成することができる。また、高橋(2009)によると、八重山におけるマラリアの有病地としてこの高い島をあげている。マラリアは、マラリア原虫を体内に持っているハマダラカに人間が刺されることで感染する。感染してから6日以上、症状のない潜伏期間があった後、発熱や悪寒、筋肉痛、倦怠感が現れ、重症の場合にはけいれんや呼吸困難になり、意識を失うことがある。そのため、八重山諸島において水田が形成される地域においてマラリアが蔓延したといえる。竹富島は低い島に属し、マラリアの無病地に分類される²⁾。

もっとも古い竹富島の集落は、12世紀末頃の東新里村遺跡が発掘されている。また、14世紀前半の西新里村遺跡が発掘されている。発掘された村落と現存する集落域は全て井戸を中心としたグスク形式の集落であった。1524年には琉球王府より蔵元³⁾が置かれた。このように、竹富島は八重山諸島において災害の危険性が低いことと、ある程度井戸による利水が可能であったことから集落が形成されたといえる。

発掘された村落がなぜ消滅したかは現在でも明らかになっていない。明治中期ごろの竹富島の村落を表した八重山村絵図によると、明治中期の集落は現存する村落の基本形態であったことが読み取れる。また、現在の東集落と西集落は玻座真(はざま)集落というひとつの集落であったことが読み取れる。終戦まで毎年、人口は増加する傾向にあった。聞き取り調査から当時の村落域は拡大せず、現在と大きな変化がないことが判明した。明治中期ごろから昭和における島の人口は現在より多いが、ひとつの家屋に複数の世帯が暮らしていたことで村落域が拡大しなかった。そのため、明治中期ごろから村落域について大きな変化がないことが判明した。

当時の生活圏は、中心部の村落から同心円状に樹林地、農地、茅場や保安林という空間構成であった。終戦後の引揚民による人口が増加し、茅場などは全て耕地化された。集落以外の地域は基本的に生産の場であるが、御嶽などの聖地が島内に点在し、その周辺は原生林が残されている。

3-2. 竹富島における生業の変化

竹富島は上述のように水田を作ることができなかったため、畑地を利用し、農産物を栽培していた。しかし、琉球王府時代から始まった人頭税により住民の生業に変化が生じる。人頭税とは1637年から1902年まで住民に課されていた税金の一種である。沖縄タイムス社(1983)によると、人頭税は一定の年齢に達したら、否応なく課税される税金で、宮古と

八重山地域にのみ課された差別的な税金であった。賦課の方法は村の規模を上・中・下の3等級、人員を年齢によって上(21~40歳)・中(41~45歳)・下(46~50歳)・下下(15~20歳)に区分し、両者の組み合わせによった。男子は、米を一人あたり平均1石8升余を上納する必要があった。また、女子は反布(たんふ)⁴⁾を一人あたり平均5反布⁵⁾を上納する必要があった。加えて役人などの免税分も加算され、そのうえに在地役人のなかには恣意的に収奪を重ねたという伝承も残る。

竹富島の島民も人頭税を納めなくてはならず、島内では収穫ができない稲作に着手するようになる。竹富島では水田がないため、西表島まで船で通い、稲の栽培時期のみ西表島で生活する「通い耕作」が行われるようになる。浮田(1974)によると、労働力のかかる田植えや収穫などの作業時は多くの島民がユイマール⁶⁾の精神のもと、田小屋にて泊まり込みで作業に従事した。

マラリアに感染する原因となるハマダラカ

は夜間に活動する。そのため、夜間に蚊に刺されないようにすることが、もっとも重要で有効な予防法といえる。そのため、通い耕作に従事していた島民は、西表島の300m東に位置する由布島に田小屋を設けた。由布島は西表島と海により隔てられているため、マラリアに罹患する可能性が低かった。終戦後にはウィラープラン⁷⁾によりマラリアを根絶したことで、西表島へ移住する者が現れる。また、人頭税も廃止され、わざわざ通い耕作を行う意義がなくなったといえる。そのため、1973年には通い耕作を続ける農家がなくなった。

男性は通い耕作を中心にしていましたが、女性は畑作に従事した。1904年から1906年にかけての「村日記⁸⁾」という農業統計資料をもとに、当時の畑作の概要をみていこう。作付面積の広い農産物は豆類、小麦、サトウキビの順であったことがわかる。

竹富島において人口が減少する 1931年までは、好景気を要因とした人口増加がつづい

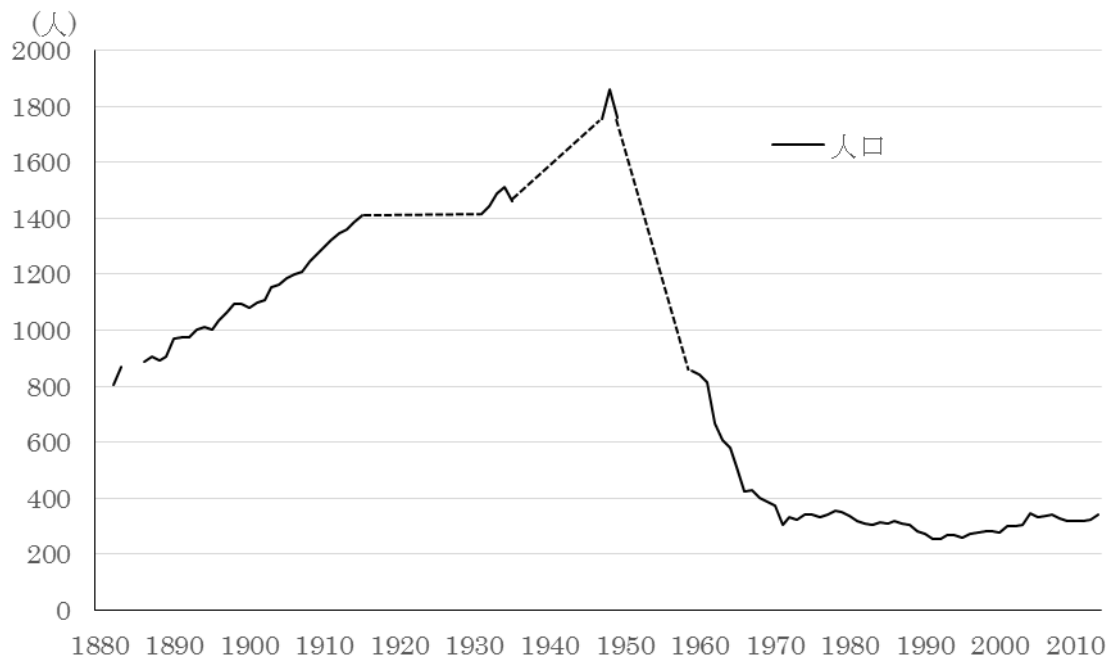


図3 竹富島における人口動態

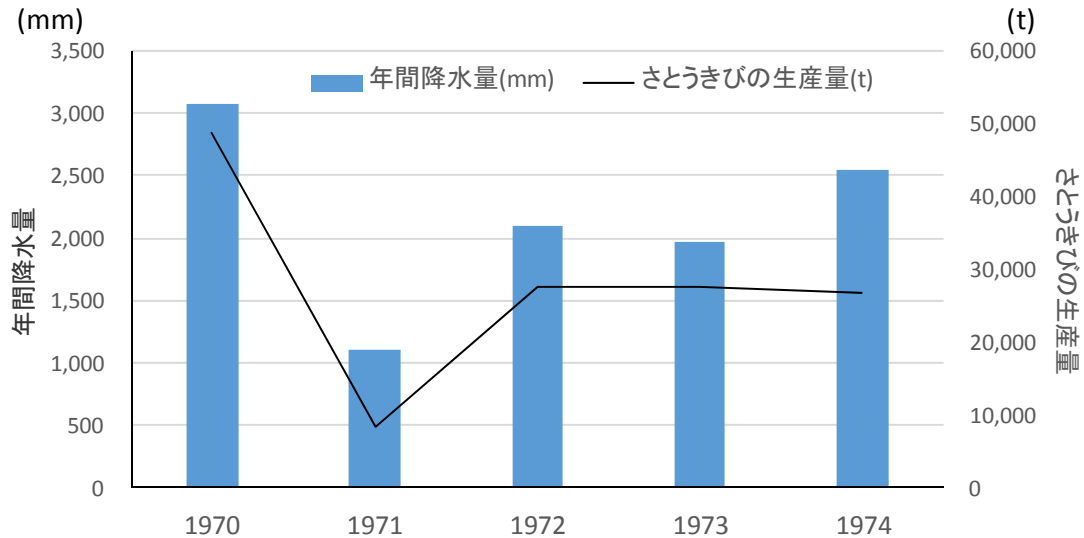


図4 年降水量とさとうきびの生産量の推移

『さとうきび及びび甘しゃ糖生産実績 昭和46-47年、48-49年、50-51年』より作成

た(図3)。しかし、昭和恐慌(1930年)などの不況から島内では働き口が限られているため、海外移民や本土への出稼ぎ民が増加する。

終戦後には外地からの引揚者の増加により、1945年には2,168人を記録し、過密化が発生した。そのため、島内のあらゆる土地が耕地に転換されたが、生活が成り立たない住人は続々と島外へ生活の場を移すようになり、人口が急激に減少する。

竹富島においては養蚕業が1902年から栽培が始まり、現金収入の乏しい農家にとって大きな収入源となり、副業として定着した。もともと、八重山地方では19世紀に養蚕が伝わったとされる。夏季には、蚕が病気となることがあり、養蚕ができないことが多かった。戦後、養蚕組合の発足や補助事業により再開されたが、繭価格の下落により1995年で飼育が終わった。

サトウキビの生産は、養蚕とならび、竹富島において重要な換金作物のひとつであった。最盛期には島内に、二施設の製糖工場が建設された。しかし、石垣島の製糖工場に買収さ

れ、収穫されたサトウキビは石垣島へ運ぶこととなった。しかし、1963年の砂糖の自由化により、売買価格が大きく下落したことでサトウキビ栽培は衰退傾向へ入った。また、1971年度のサトウキビの収穫量と年降水量が非常に少ないことがわかる(図4)。これは、1970～1972年に追い打ちをかけるように、干ばつと台風の被害が発生したことで、収穫量が減少したのである。特に台風については、巨大台風28号により、瞬間風速が66.9mを記録し、根こそぎサトウキビが倒れたという。これにより竹富島では、生活が困窮する農民が多くなり、サトウキビ産業は壊滅状態となった。

竹富島では、四季を通して牧草が生育するため、島民は牧畜を手軽に営むことができる。人口が減少し、若者の流出が多くなることで、農業が衰退すると荒廃した畑が多くなった。その荒廃した畑を牧草地として利用し、1964年には「竹富牧場株式会社」、1969年には「竹富共同牧場組合」がそれぞれ発足する。「竹富牧場株式会社」は1970～1972年の干ばつと台

風の被害により牧場の経営が悪化し牧場を売却し、倒産する。一方、竹富共同牧場は現在でも存続し、産地ブランドである石垣牛を飼育し、出荷している。1972年に日本復帰を果たすと、土地の買い占めが起こり、生業が農・畜産業から観光業に変化する。

1970年の干ばつと台風の影響を受ける前までは、旧来の畑作を中心とした農業がつづけられていたが、牧畜や観光業に大きく転換された。

3-3. 竹富島における開発の歴史

1) 1970年代の観光開発

1972年の日本復帰により、本土の観光開発業者による島内における土地の買い占めが活発になる。とくに、竹富牧場株式会社が倒産したことで牧場跡地が観光開発業者に売却されることとなった。石垣島の竹富島出身者で結成される「郷友会」を中心として、竹富観光開発株式会社が設立され、土地の買い占めが続いた。その中で、島の町並みを保存していく意見が出てきたのは、文化人や有識者らの活動によるものである。作家の岡部伊都子や日本民芸協会の外村吉之介らにより保存会など、さまざまな島民組織が誕生することとなる(谷沢 2010a)。

土地の買い占めが進行する一方、島民による観光地としての取り組みが増加した時期でもある。とくに、現在では竹富島を代表する観光施設である水牛車観光は1976年から始まった。もともと、自動車がなく、民宿の送迎用として利用されていた水牛車が島内の名所を巡るものへと変化した。また、観光客の増加にともない、民宿の増加やマイクロバスによる送迎を行う竹富島交通が設立されるなど観光インフラが整備された時期でもある。

2) 1980年代の観光開発

1979年の沖縄県観光振興条例に基もとづき、竹富島では1982年から集落保存の取り組みが始まる。とくに町並み保存において先進的であった妻籠宿(つまごじゅく)への島民の視察により、重要伝統的建造物群保存地区の

指定を受けることを目標に島民と行政が一体となって取り組むことになる。とくに、沖縄県によって1982年に実施された沖縄観光振興に関する総合計画調査において、「竹富島の集落保存、町並み保存と観光利用」と明記された(谷沢 2010b)。

1986年に「竹富島憲章」が制定される。保全優先の基本理念として5項目がある。まず、「売らない」、島の土地や家などを島外者に売ったり無秩序に貸したりしないこと。第2には「汚さない」、海や浜辺、集落等島全体を汚さない。また汚させないこと。第3の「乱さない」、これは集落内や道路、海岸等の美観を広告や看板、その他のもので乱さないこと。第4の「壊さない」、由緒ある家や集落景観、美しい自然を壊さないこと。第5には「生かす」、伝統的祭事行事を島民の精神的支柱として、民俗芸能や地場産業を生かし、島の振興を図ること。竹富島憲章は、今後の観光化における基本的な枠組みが明記されており、よりよい島独自の観光地化を進めるための禁止事項や島民の活動などが明記されている。

このように住民組織による町並み保存や活動内容が明確化され、この憲章の新たな役割として、集落保存について必要な措置を国、県、町に対して要請していくことが挙げられている。竹富島憲章が制定されていた翌年の1987年に、国より重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

3) 1990年以降の開発

全国的な流れとして、総合保養地域整備法(1987年)の施行によりリゾートブームが起きた。第二次沖縄県復興開発計画(1982~1991年)によって、沖縄県は観光レクリエーション施設の整備を進展させ、リゾート開発の推進などから観光客数を300万人に引き上げることを目標とした。沖縄県は1991年に、この目標を達成することとなる。

また、第三次沖縄復興開発計画(1992~2001年)においては、地域経済の活性化に観光業を重視するようになり、観光客数の目標を500万人に設定した。2001年には沖縄県の観光客

は401万人まで増加した。このように観光客が増加した要因としては、航空券を安価に入手することが可能になったことが大きな要因となっている。具体的には1995年の航空券の事前購入割引や1997年の安価なパッケージ商品の誕生が挙げられる。

このような時代変化のなか、竹富島においても急激に観光客が増加する。1992年には約13万人であったのに対し、2008年には46万人にまで増加した。

4. 竹富島における土地利用の変化

竹富島において島民は従来、集落の外にある畑で農作業に従事し、家へ戻るという行動パターンが一般的であった。しかし、人口減少により家屋が取り壊され空き地が多くなったことと、高齢化や観光業の進展にともない家から離れた畑を耕すよりも、家に近い空き地で自給用の畑を利用する形態に変化した。このように、社会的な変化に影響を受けながら島民の生活が変化したことを表すものとして住宅跡地がある。

細かな土地利用や家屋の配置を判断するため、住宅地図(1992年；2000年)と国土基本図(1975年)を利用した。また、家屋が飲食店などの観光施設であるかを判断するためにはNTTが発行するタウン&ハローページ(1985年；1992年；2000年)を利用した。

現在、竹富島では住居が建て壊され、建物が残っていない土地がある。しかし、住宅地の周りを囲む石垣は景観計画のなかでも保存物件に該当し、保存されている。そのため、石垣を崩して大きな農地や住宅地の造成ができず、島民らは住宅跡地の形状をそのまま利用して、竹富島憲章にもとづき区画を管理している。本論文では、住宅跡地を対象地域に、面積といった面的な広がりから検討するのではなく、住宅跡地1つを1区画として数えることで、島民による土地利用の選択を読みとる。上記のことから、住宅跡地1つを1区画

として捉え、住宅跡地の土地利用の変遷をみていこう。

4-1. 明治時代中期の土地利用

八重山村絵図より作成した明治時代の中期的土地利用図によると、それぞれの集落の中心に家屋が密集し、空き屋敷は集落の外延部に多いことがわかる(図5)。また、農業の生産の場である畑はこの当時に、集落内にはほとんど分布せず、集落の外側で農業が行われていたことがわかる。

表1は家屋の数と空き屋敷地の数を表したものである。当時の人口が約1000人であったのに対し、東集落と西集落、仲筋集落をあわせた合計の家屋数は156軒であり、50軒が空き屋敷であった。

4-2. 1975年の土地利用(農業衰退期)

1975年は、農業が干ばつと台風により壊滅状態になった1971年から4年が経過した年である。家屋数は107軒であった(表2)。仲筋集落は家屋よりも荒地が多いことが特徴として読みとれる(図6)。

人口は1971年に304人と急激に減少するが、その後は340人前後で推移する。干ばつや台風の影響で一時的に島の人口は減少するが、土地利用図が示す1975年には人口は回復している。

台風の被害により、生活に困窮した一部の島民は、土地を売ることによって資金を得たが、この土地の売買により本土の観光開発との接点が生まれた。この時期、小浜島をはじめ、八重山諸島において観光開発が盛んであり、竹富島もその流れのなかで本土の観光開発業者によって観光開発が計画されていた。

4-3. 1985年の土地利用(観光地形成期)

図7は、観光地化が開始された初期の1985年の土地利用を表した。1985年の人口は305人と減少傾向であった。これは、バブル景気により賃金の高い本土へ人口が流出したこと

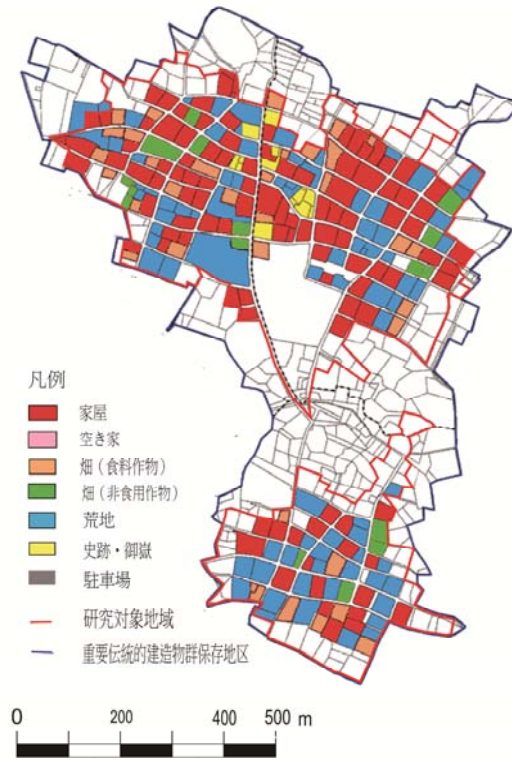


図5 明治時代中期ごろの住宅跡地の土地利用図
『八重山村絵図』より作成

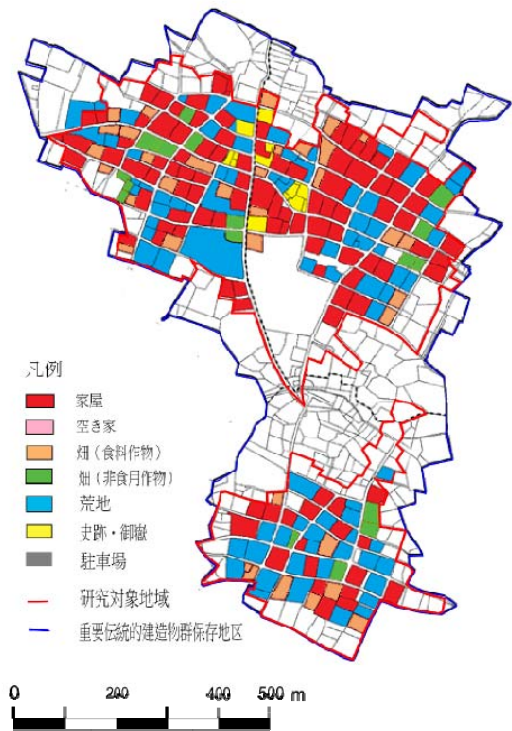


図6 1975年の住宅跡地における土地利用図
国土基本図（1975年）より作成

表1 明治時代中期ごろの住宅跡地における土地利用区画数

	東集落	西集落	仲筋集落	全体
家屋数	65	56	35	156
空き家数	17	14	19	50
人口(1900年)	1080人			

沖縄県統計書より筆者作成

表2 農業衰退末期(1975年)の住宅跡地における土地利用区画数

	東集	西集	仲筋集落	合計
家屋	43	44	20	107
駐車場	0	0	0	0
畑(食料作物)	15	12	8	35
畑(非食料作物)	5	8	4	17
荒地	34	27	28	89

図6をもとに筆者作成

が要因として考えられる。しかし、人口が減少したものの1975年と比較すると家屋数は増加し、荒地などが減少したことがわかる。

1986年に竹富島憲章が制定されると、土地利用にも多くの制限がかけられた。元々、島民が本土の観光開発などに抵抗を見せていたため、大規模な観光地化が進行することはなかった。竹富島憲章ではそのような無秩序な開発を抑えるべく、調整委員会の届出が必要となっている。また、土地利用の観点では、竹富島憲章において「第二章 美しい島を守る。その第10項に、空き家、空き屋敷の所有者は、地元で管理人を指定し、清掃及び活用を図る。」と明記されている。これにより、自分の土地でなくとも、島民は自らが管理する土地を割り当てられ管理するようになる。しかし、管理方法や用途については明記されていないため、島民に任せられる。

4-4. 1992年の土地利用

図8の1992年の土地利用を検討すると、住宅地図より作成したため、空き家の数が新たに判明した。家屋数の約15%が空き家であり、西集落に多いことが特徴といえる。1992年において荒地から家屋を中心に増加した。とくに仲筋集落において増加が顕著である。

食糧作物の畑が大幅に増加している。集落の外延部に立地している。主な利用は宿泊施設の料理として出されることが多い。マンゴーやドラゴンフルーツといった果物や野菜類が栽培されることが多い。

4-5. 2000年の土地利用(観光地発展期)

図9は観光客が急激に増加した2000年の土地利用図である。1992年に比べ、空き家が減少したことがわかる。

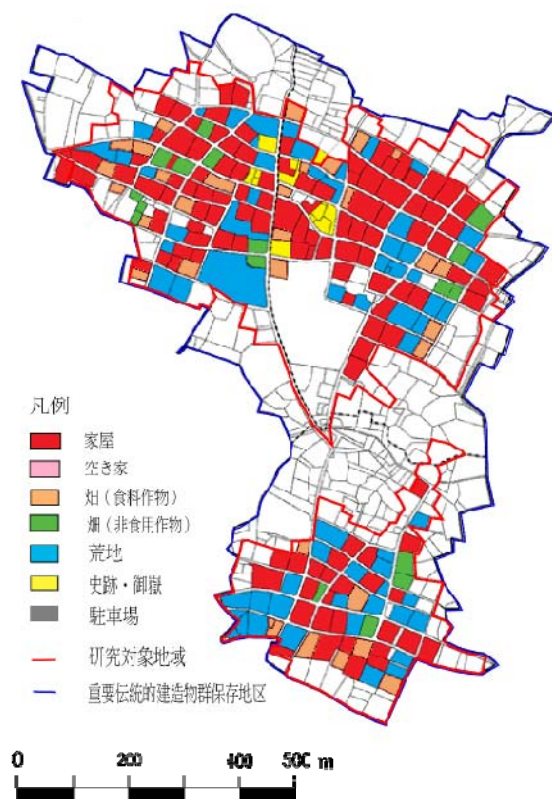


図7 1986年の住宅跡地における土地利用図
航空写真(1986年撮影)、『タウンページ』(1984年発行)より作成

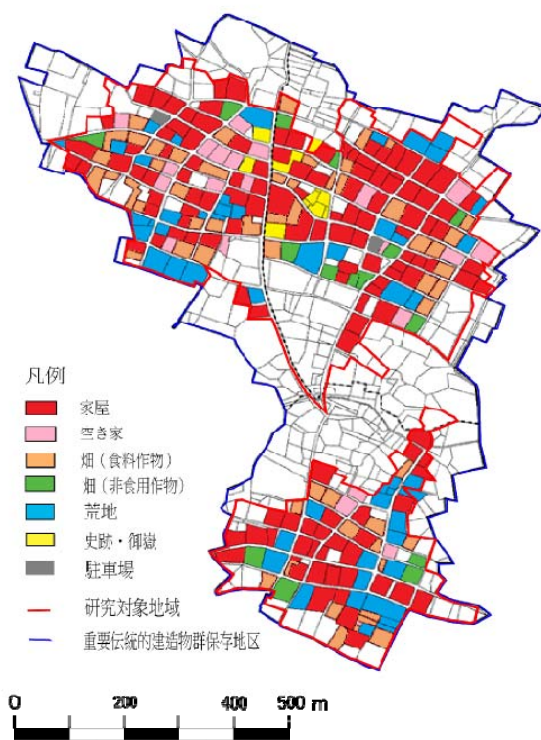


図8 1992年の住宅跡地における土地利用図
『ゼンリン住宅地図』(1992年)より作成

表3 観光地形成期(1986年)の住宅跡地における土地利用区画数

	東集落	西集落	仲筋集落	合計
家屋	47	46	27	120
駐車場	0	0	0	0
畑(食料作物)	14	11	8	33
畑(非食料作物)	5	7	4	16
荒地	23	15	26	64

図7をもとに筆者作成

表4 観光地の発展期(1992年)の住宅跡地における土地利用区画数

	東集	西集落	仲筋集落	合計
家屋	55	42	34	131
空き家	6	12	4	22
駐車場	1	1	0	2
畑(食料作物)	21	19	17	57
畑(非食料作物)	9	3	4	16
荒地	13	20	20	53

図8をもとに筆者作成

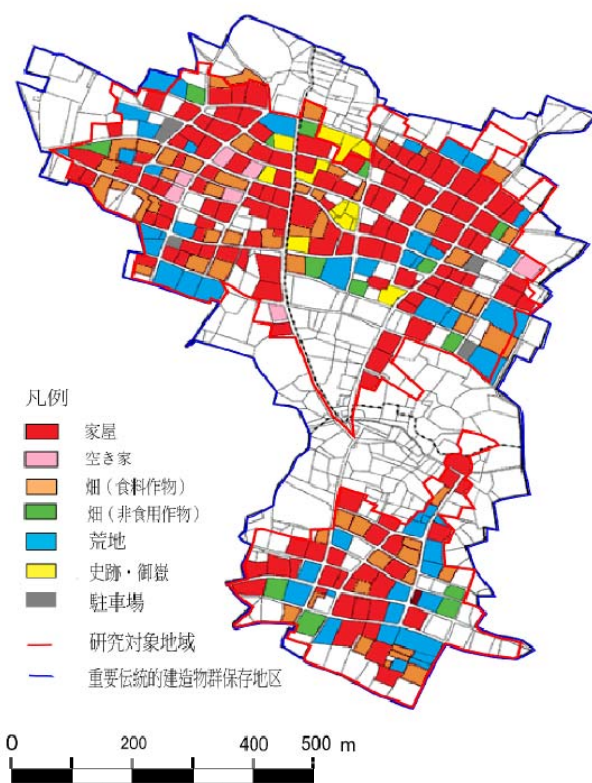


図9 2000年の住宅跡地における土地利用図
『ゼンリン住宅地図』(2000年発行)より作成

表5 観光地発展期(2000年)の住宅跡地における土地利用区画数

	東集落	西集落	仲筋集落	合計
家屋	57	52	30	139
空き家	1	6	0	7
駐車場	2	3	0	5
畑(食料作物)	18	16	17	51
畑(非食料作物)	7	3	4	14
荒地	16	15	20	51

図9をもとに筆者作成

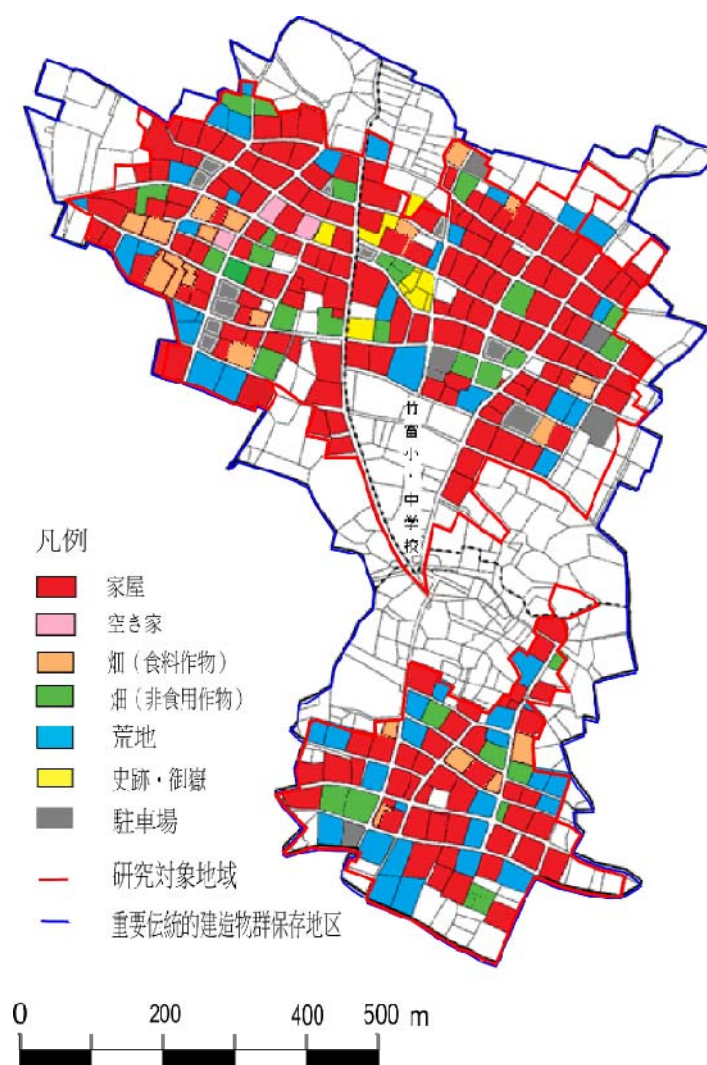


図10 2013年の住宅跡地における土地利用
現地調査により筆者作成

表6 2013年の住宅跡地における土地利用区画数

	東集落	西集落	仲筋集	合計
家屋	72	68	40	180
空き家	0	2	0	2
駐車場	9	7	1	17
畑(食料作物)	5	10	5	20
畑(非食料作物)	10	11	12	33
荒地	14	16	24	54

図10をもとに筆者作成

1991年の人口は254人と記録に残っているなかで最も少ない。翌年の1992年の人口も255人であった。しかし、2000年には279人と増加傾向に転じる。谷沢(2011)は、集落景観の保全を基軸に、自然景観の保全、伝統工芸・伝統芸能の継承を含めた総合的な地域づくりが人口増加につながったとしている。独特な景観のみならず、伝統行事や言葉など竹富島の文化を総合的に利用している点が重要であるという。Uターンする人を多く呼び込み、家屋の増加や荒地の減少につながったと考えられる。

4-6. 2013年の土地利用(観光地発展期)

2013年の土地利用をしてみる(図10)と、パショウや竹が育てられる非食料作物の畑や家屋が多く増加したことがわかる。一方、食糧作物の畑が大きく減少したことがわかる。

駐車場の区画数が大幅に増加した。2002年に竹富島の集落の外側を1周できる環状道路が整備されたことが大きな要因である。宿泊施設は、この道路を利用することで、集落内にできるだけ車を乗り入れずに、宿泊客の送迎が行われている。その他に、観光業が軌道にのっていることや、外部の新たな観光業の担い手が持ち込むことが増加の背景にあると考えられる。

5. 考察

5-1. 観光地化による変化

重要伝統的建造物群保存地区の指定を受け、島民主体による観光化がすすめられた。入込客数は、1994年までは大きな変化はなく、12万人前後で推移している(図11)。しかし、1995年の航空券の事前購入割引の開始や1997年の安価な旅行のパッケージ商品の解禁など安く航空券を手に入れることが可能となり、観光客が急増する。また、2000年の琉球王国のグスク及び関連遺産群の世界遺産登録などもあり、入込客数は増加しつづける。

このような観光客の増加により、観光施設が増加した(図12)。1980年では宿泊施設が全体の3分の2を占めていたが、毎年減少しつづけて、飲食店などが増加している。これは、竹富島への観光客の大部分が日帰り観光客であることと関連している。高速船で石垣島から10分であるため、竹富島の観光は石垣島からの日帰りツアーなどに組み込まれることが多い。1980年に20軒ほどあった民宿も、特徴を打ち出せない民宿は営業を中止した。

しかし、観光客が増加したことで、新たに店を出す島外出身者の存在が近年の特徴としていえる。観光地化がすすむことで、専用住居⁹⁾の割合が低下し、現在では約4割の家屋で観光業などが行われていることが明らかとなった(図13)。



図 11 竹富島の入込客数の変化
竹富島ホームページにより作成

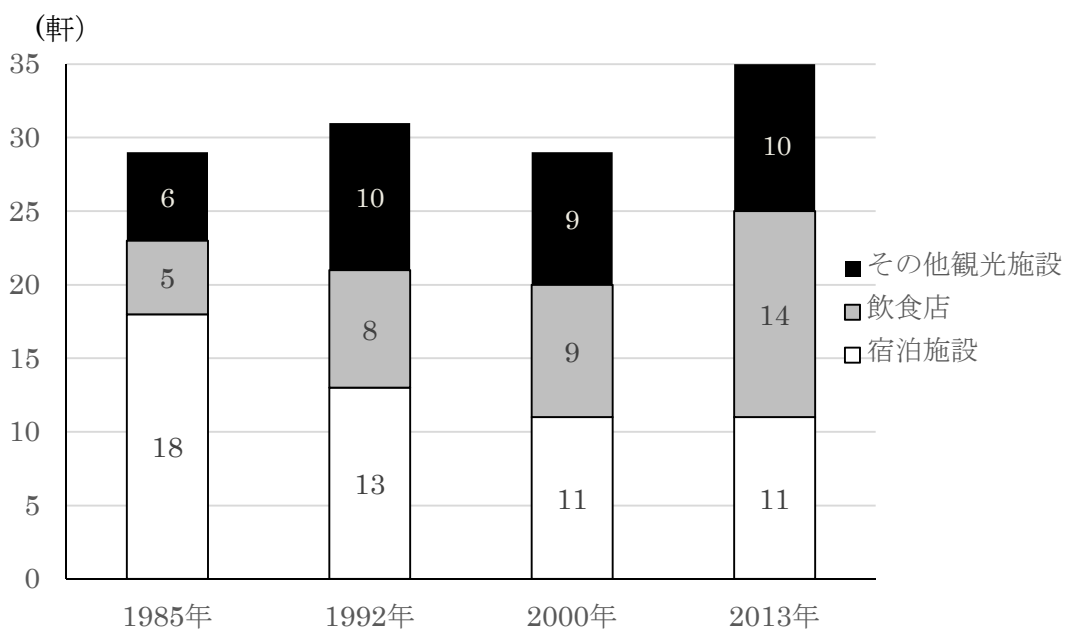


図 12 竹富島の観光施設の推移
図 7～図 10 をもとに筆者作成

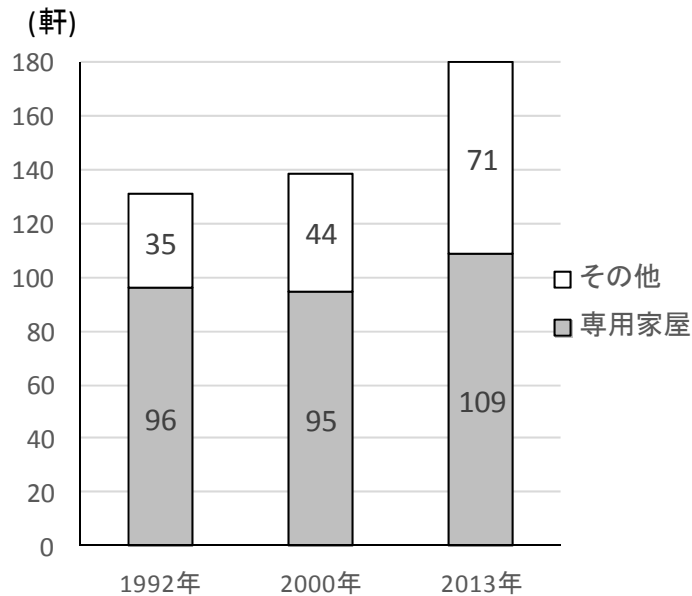


図 13 住宅跡地における専用住居数の変化
 図 8～図 10 をもとに筆者作成

6. 結論

これまで述べたように、竹富島では島民が中心となって観光化をすすめ、重要伝統的建造物群保存地区の指定を受け、八重山地域の観光においても高い地位を確立してきたといえる。もともと、沖縄は観光地として注目されていたこともあり、日本復帰からすぐに開発の渦中に入ることとなった。観光化の大きなターニングポイントのひとつは 1970～1971 年の干ばつと台風の被害である。従来の自給を基本とした生活と換金作物による生活が成り立たなくなり、土地が売買されるようになった。また、大手の観光開発業者によって開発されなかった要因として、1970 年代から民俗学者をはじめとする有識者が島民の一部を説得し、反対運動を起こすことができたからといえる。

このような観光化による乱開発の可能性とその反対運動が、島民が中心となって自主的に土地の利用と管理を継続してきた。島民は観光化により家屋が増加する一方で、高齢化により管理が比較的しやすい荒地やバショウを植えるといった工夫も見られた。また、島外出身者による観光施設も見られるようにな

った。しかし、管理方法や用途について、竹富島憲章に明記されていないため、様々な形態が存在していることが明らかとなった。

島外出身者は土地を借りながら観光施設を経営している事例が明らかになった。竹富島憲章には「島の土地や家を島外者に売らない。」と明記されている。島外出身者は土地や家を借りながら商売をしているが、島外出身者は絶対に土地を取得することができないわけではない。聞き取り調査から、これまで、1 事例のみ島外出身者が土地を取得することがあった。

また、新たな雇用形態も発生したことがわかった。従来では、島民が経営する民宿などでもその家族が中心となり経営されてきた。人手が足りない場合には、ヘルパーと呼ばれる臨時のアルバイトを雇うなどして雇用が保たれてきた。しかし、近年では多くの観光施設が立地するようになった。とくに、2012 年にオープンした大手ホテルチェーン『星のや』は、毎日朝 6 時と深夜 0 時に竹富島と石垣島を往復するチャーター便を手配している。これにより、石垣島から竹富島へ人びとが通勤するようになった。

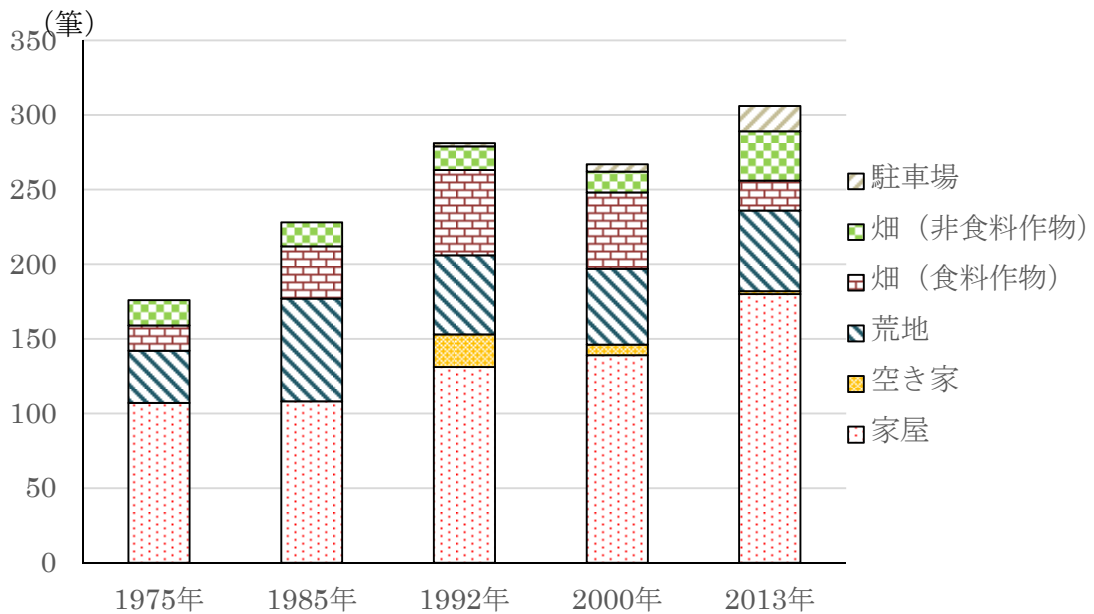


図 14 住宅跡地における土地利用の変遷
図 6～図 10 をもとに筆者作成

竹富島を訪れる観光客の多くは日帰り客が大多数を占めるようになったことで、飲食店では日帰り客が多くなる昼ごろから開店する。このように、観光客の宿泊から日帰りという観光パターンの変化から雇用形態や観光施設の種類についても変化が生じたことが判明した。

また、今後の竹富島における観光にも変化が生じてくるだろう。要因としては、世代交代である。観光地化がすすめられた 1970 年代に中心となって観光地化や景観整備の取り組み行っていた人々は現在 70 歳以上の高齢者の人々である。部落の集会などには現在でも出席しているが、民宿などの仕事は子どもやヘルパーなどに任せている人が多い。

観光地化がすすめられるようになったのは、農業の衰退も原因ではあるが、観光業をはじめとする産業を振興し、島の人口を増やすためであったという。島嶼部であるため、利便性が非常に悪く、多くの人が人生のなかで一度は本土へ渡っている。もし観光化がすすめ

られていなければ、島の大部分が牧場になっていたか大手の観光開発業者により乱開発されていたのではないかと話す島民が多かった。

谷沢(2011)は、集落景観の保全を基軸に、自然景観の保全、伝統工芸・伝統芸能の継承を含めた総合的な地域づくりが開始されたことで地域の魅力の創生と観光化の成功につながったと述べている。現在でも放棄地や空き地が少ないことや清掃などの面で現れている。しかし、島外出身者の増加や世代交代が進むと予想されるため、これまでの竹富島に暮らすという認識の共有がより重要になってくると考える。竹富島が観光地として人気があるのは、独自の景観や文化が島民によってよく維持されているためである。島を守るという理念を受け継ぎながら、新たな担い手が必要となり、社会の変化に合わせた取り組みが必要であるといえる。

謝辞

本論文は、2013年度に日本大学文理学部に提出した卒業論文を加筆、修正したものである。本論文を作成するにあたり、矢ヶ崎典孝教授からは丁寧な指導と貴重な助言をいただいた。調査に協力していただいた松竹荘の皆様をはじめ島民の皆様にはお世話になりました。記して、感謝を申し上げます。

(日本大学文理学部地理学科卒業 2013年度；京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻博士課程 在学)

注

- 1) 標高が高い島のこと。八重山諸島では山がある地域に水田が立地するため、石垣島や西表島がマラリアの有病地であった。
- 2) しかし、マラリアに罹患する可能性があったと考えられる。竹富島における第2次世界大戦中の死亡原因として、マラリアが記録に残っている。
- 3) 琉球王府時代の行政府
- 4) 一人分の着物が縫える長さの布。
- 5) ここでいう反布は一人分の着物が縫える長さの単位である。
- 6) 「相互扶助」を順番に、かつ平等におこなっていくこと。結。
- 7) 米軍によるマラリアの撲滅作戦。
- 8) 竹富町役場 2005
- 9) 観光施設が併設されていない住宅のこと。

参考文献

浮田典良 1974. 八重山諸島における遠距離通耕. 地理学評論 47(8): 511-524.
大城直樹 1990. 亜熱帯島嶼の集落立地と生活様式：八重山群島・小浜島. 人文地理 42(3): 220-238.
沖縄大百科事典刊行事務局 1983. 『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社.

厚生労働省 HP 感染症についての情報：マラリア. <http://www.forth.go.jp/useful/Infectious/name/name39.html>(最終閲覧日 2013年1月12日)
佐藤快信 2008. 島嶼開発における観光開発の影響：八重山諸島の観光を事例に. 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要 6(1): 25-32.
竹富町史編集委員会 2011. 『竹富島』 竹富町役場.
竹富町史編集委員会 2005. 『竹富町史第十巻 資料編近代1』 竹富町役場.
谷沢 明 a 2010. 1970年代前期の開発と保存に関する動向：沖縄県竹富島における観光文化研究(1). 愛知淑徳大学論集 現代社会学部・現代社会研究科篇 15: 17-35.
谷沢 明 b 2010. 1980年代の集落保存に関する動向：沖縄県竹富島における観光文化研究(2). 愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告 5: 11-28.
谷沢 明 2011. 集落景観・地域文化を守り活かす地域づくり：沖縄県竹富島における観光文化研究(3). 愛知淑徳大学論集. 交流文化学部篇 1: 67-83.
花岡拓郎・西山徳明 2008. 歴史的集落・町並みにおける保存対象の選定手法に関する研究：竹富町竹富島伝統的建造物群保存地区を事例に. 日本建築学会計画系論文集 73(625): 595-600.
福田珠己 1996. 赤瓦は何を語るか：沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動. 地理学評論. Ser. A 69(9): 727-743.
農林水産省 2009. 耕作放棄地の現状と課題 「かけがえのない農地を守るために－耕作放棄地対策推進の手引き」 <http://www.maff.go.jp/j/nousin/tikei/houkiti/pdf/tebiki01.pdf> (最終閲覧日：2014年8月3日)
和宇慶朝太郎 2002. 前近代における竹富島の集落形成：竹富島の集落と民家の歴史研究(1). 日本建築学会研究報告九州支部 3 計画系 41: 393-396.